



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エトノス・イデオロギー：ソヴィエト民族学における「エトノス理論」の諸相
Author(s)	三栖，大明
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16975号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16975
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99819
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroaki_Misu_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：三栖 大明

学位論文題名

「エトノス・イデオロギー：ソヴィエト民族学における「エトノス理論」の諸相」

本論文は、ソ連期の民族学者 Iu. V. ブロムレイと L. N. グミリョフのエトノス定義を巡る論争および両者のエトノス・ヒエラルキー論に焦点をあてることで、ソヴィエト民族学を特徴づけるエトノス理論の具体像を明らかにするものである。従来の研究においては、グミリョフの理論が「生物的」であるとされ「社会的」なブロムレイの理論と対比される傾向が見られた。これに対し、本論文では、この2分法が形成された歴史的背景や民族学における論争のプロセスを明らかにしつつ、これまで見過ごされてきた両者の主張を個別に検討することを通して、ポスト・スターリン期以降のソ連における民族観の変遷を明らかにした。

言語、文化、信仰、地域などの点で多様な住民構成を抱える領域をロシア帝国から継承したソ連は、社会主義を理念に掲げる一方で民族単位に基づく国家運営を行った。ソ連における民族学者にはその施策を支えるテクノクラートとしての側面があり、彼らの活動は民族政策と密接な関りを持った。民族単位に基づく制度的実践のためにソ連では原初主義的な民族理解が強く根付いたが、民族学者たちはこの民族観を裏付ける論拠を提供した。特に、1960年代後半から民族学界ではエトノス（*etnos*、英語の *ethnicity* に相当）をテーマとした議論が盛んに行われ、ソ連民族学研究所の所長ブロムレイと彼の論敵グミリョフによってエトノスの理論化が図られた。彼らが構築したエトノス理論は、ソ連崩壊から約30年を経た今日もロシア社会で命脈を保ち、現代ロシアで民族を語る際に一つの前提となっている。

しかし、当のエトノスとは何を指すのかという点は実は必ずしも明確ではない。グミリョフとブロムレイはエトノス定義を巡って論争を繰り返したものの、結局、エトノスとは何かを一義的に決めることはできなかった。彼らの論争に参加した論者の言葉を借りるなら、ソ連におけるエトノス概念は「不定形な構造」をしていたのである。実際、ブロムレイとグミリョフは一般にカースト、冒険家集団、部族、宗教団体、身分集団、

政治結社、国民、言語共同体、帝国市民、文明圏の住民…などあまりにも多岐に渡る集団をエトノスの範疇に含めていた。その上で、両者ともにこれらの諸集団が集合することで複数の階梯から成るエトノス・ヒエラルキーが形成されると主張したのである。本論文では、こうしたブロムレイとグミリョフの主張をポスト・スターリン期以降のソ連における民族観の変遷の中に位置付けつつ分析する。

第1章では、ソ連における民族学の歴史とエトノス概念の位置づけを論じる。ソ連の成立当初から、民族学はソ連の民族政策と密接な関係にあった。民族学者たちには1920年代前半に実施された民族政策を支えるテクノクラートとしての側面があった。他方、スターリン期には、帝政期以来の専門家が抑圧されるとともに、民族学は独立した分野ではないとされ、マルクス主義歴史学の下位分野に編入された。しかし、フルシチョフ期から独自の分野として復興を遂げた。他方、同時期には社会主義の発展に伴って国内諸民族が均質化して単一のソヴィエト人へ融合すると唱えられた。1966年に民族学研究所の所長となったブロムレイは、それにもかかわらず独自のエトノスとしての意識を維持する人々がいると主張し、この状況を「民族のパラドクス」と呼んだ。この「民族のパラドクス」を背景としてブロムレイやグミリョフといった学者たちが民族学の観点からエトノスに着目したのである。ブレジネフ期を通してグミリョフは民族学界においては周縁的人物であり、ソ連における公式的なエトノス理論はあくまでブロムレイのものであった。しかし、ペレストロイカ期にグミリョフの理論は大衆的人気を博し、この関係性に変化が生じることとなった。

第2章では、ブロムレイやグミリョフによるエトノス理論が登場する以前に1966-68年に『歴史の諸問題』誌で行われたナーツィヤ概念を巡る論争を分析する。この論争では、ソヴィエト人への国内諸民族の同化主義的な融合論台頭を背景として、1913年にスターリンが提起したナーツィヤ (*natsiia*, 英語の *nation* に相当) 定義の妥当性が議論された。その過程で「エトノス共同体」や「エトノス意識」といった民族学用語が借用され、ナーツィヤは資本主義や社会主義など社会の発展段階を越えて持続するエトノス共同体だとされた。ナーツィヤをエトノス共同体だと再解釈した学者の多くは民族的マイノリティであり、彼らは共通してエトノス共同体とソヴィエト人が共存可能なのだと主張した。この『歴史の諸問題』論争では、エトノス共同体に史的唯物論が想定する社会の発展法則とは異なる独自の变化過程があるとされ、またエトノス共同体の特徴として各集団に固有のエトノス意識が挙げられた。このため、ソヴィエト人と共存しつつも

独自の意識を維持するエトノスとは一体何かについて、厳密に定義する必要性が生じたのである。ブロムレイとグミリョフは、この論争で提起されたエトノス観の延長でそれぞれ独自にエトノス理論の構築を試みた。

第3章では、1970-71年の『自然』誌におけるブロムレイとグミリョフのエトノス定義を巡る論争を取り上げる。1970年に『自然』に掲載された論文において、グミリョフは言語や文化といった特徴からエトノスを捉える立場を否定し、エトノスごとに異なる行動規範の差異を景観への適応や熱情性に由来するものだと主張した。グミリョフの議論はソ連でイデオロギー上の前提とされた史的唯物論に抵触すると見做され、民族学研究所の所長としてエトノスの理論化を図っていたブロムレイが批判論文を寄せた。これをきっかけとして複数の学者が議論に参加し、ソ連で初めてエトノスという用語を巡る論争が生じた。この論争では、エトノスの定義が重要な論点となるとともに、『歴史の諸問題』論争では部分的に論じられるにとどまったエトノスの遺伝的性質が大きく取り上げられた。『自然』論争は、『歴史の諸問題』論争で定まらなかったエトノス共同体の定義が探究された点で、ソ連における民族概念史に新たな段階を画するものであった。しかし、いずれの論点においても論者が合意に達することはなく、エトノスを一義的に定義することができないという現実が露呈した。そうした状況下で、諸説あるエトノス論のうちグミリョフの学説が周縁化され、ブロムレイの学説が公式的なものとなったのが『自然』論争であった。

第4章では、1988-89年に『旗』誌と『哲学の諸問題』誌で再燃したブロムレイとグミリョフの論争を扱う。この論争では、エトノス定義とエトノスの遺伝的性質をめぐって、『自然』論争と同様の討議が繰り返された。その際に、ブロムレイは自身の矛盾を説明できず、またそれを批判したグミリョフもエトノスに確たる定義を与えることができなかった。一方、1970年代初頭とは異なり、グミリョフが提起した「民族的キメラ」という概念が新たな争点となった。論争に至る経緯に注目するなら、『旗』『哲学の諸問題』論争は、ペレストロイカ期に公式学説が相対化される中で、『自然』論争以来疎外されてきたグミリョフの学説が復権した出来事であった。当時、グミリョフの周囲にはロシア民族主義と関連する人々が集っており、キメラ論を巡る論争はこのロシア民族主義者の動向を背景とするものであった。論争の直後にブロムレイは死去し、1970年に始まった2人の理論家のエトノス定義を巡る論争は、約20年の歳月をかけたにもかかわらず、解決を見ないまま終焉を迎えたのである。

第5章では、ブロムレイのエトノス理論のうち従来注目されてこなかった遺伝学的側面を取り上げ、彼がエトノスを族内婚単位と見る観点の延長上でエトノス・ヒエラルキー論を構築したことを示す。1960年代後半にエトノス理論を発表し始めた当初、ブロムレイはエトノスが族内婚に由来する遺伝学単位であると主張していた。しかし、彼によれば、部分的な族外婚によってエトノス同士の間には婚姻連続体が形成されるという。ブロムレイは遺伝学上の最小単位たるデームを基礎に、多種多様な集団をエトノスと見做し、サブエトノスからエトノス、メタエトノス共同体へと至るエトノス・ヒエラルキーが見られると主張した。諸民族の「接近と融合」論に代表される従来のマルクス主義的なナーツィヤ観が試される中で、ブロムレイは各集団の固有性を遺伝学によって本質化するとともに、エトノス同士が部分的に連続すると述べることで、ソヴィエト人への国民統合論をより多元的なものへと変化させたと言えるだろう。

第6章では、グミリョフが行動規範以外の客観的特徴を除外した特殊なエトノス定義によって多種多様な集団をエトノスと見做し、それらエトノスとされた諸集団が集合してエトノス・ヒエラルキーを形成すると主張したことを示す。スターリンによるナーツィヤ定義以来、ソ連では民族を言語や文化を始めとする客観的特徴の集合として捉える立場が一般的であった。しかし、グミリョフはそれらの特徴をエトノス定義から除外し、代わりに行動規範の差異を通して観察される「我々」と「彼ら」の区別に注目した。その結果、さまざまなレベルの社会集団がエトノスと見做され、それらの諸エトノスが最下層のコンソルツィヤからサブエトノス、エトノスを経てスーパーエトノスへと至るヒエラルキーを形成するのだとされた。このようにグミリョフは独自の行動パターンから自他を区別する多様なレベルの共同体をエトノスの範疇に入れた。その際にグミリョフは、地理的環境との関係や熱情性などの疑似科学的根拠を用いることで、それらの集団の民族らしさを補強した。加えて、グミリョフはソヴィエト人を多様なエトノスやサブエトノスからなるスーパーエトノスと見做し、ユーラシア主義的な歴史観を援用しつつ、その「民族的起源」を叙述したのである。

終章では、以上の議論を踏まえ、ブロムレイとグミリョフがエトノスの定義を曖昧にしつつソ連社会の多様な住民集団をエトノスと見做し、それらの諸集団が巨大エトノスの内部で相互作用するものだとして主張したことを示す。1960年代末の『歴史の諸問題』論争では、ナーツィヤはエトノス共同体であるがゆえにソヴィエト人と共存可能だとされた。特に、エトノスとしての意識があれば、それまでナーツィヤの根拠とされた諸特徴

が失われても独自集団として認められると考えられた。しかし、当のエトノスとは何かという定義は曖昧であり続けた。このためにブロムレイとグミリョフの議論においては多種多様な集団がエトノスと見做され、各集団が対置されるレベルごとに多層的な民族的帰属があり得ると考えられた。その上で、諸エトノスがエトノス・ヒエラルキーの内部において相互作用するとされたのである。加えて、このヒエラルキーの総体（ソヴィエト人が想定される）も一個の不可分のエトノスと見做され、グミリョフに至ってはその多民族性と一体性を過去の歴史に遡って本質化した。以上のように、ブロムレイとグミリョフによるエトノス理論はともに、多様な集団単位の維持とそれらのソ連への統合を両立させるというポスト・スターリン期の民族政策上の課題に応えるものであった。そのため、彼らは2度の論争を経るほどに対立しながらも、その理論的帰結に関しては類似した形態へと収斂せざるを得なかったのである。